

14.5
53

別書誌
合12冊



始



14.5-53



1200501212816

彙報別冊第七十一號

於極東に
ける露西亞の準備工作

全國經濟調查機關聯合會

14.5-53

極東に於ける露西亞の準備工作

同研会会 寄贈本

(昭和九年九月十八日於第六十二回東京支部會)

芦田均氏

最近風の友人から聞きますと稻荷大明神の御神託に依れば、本年十一月二十四日に日露戦争が始まるといふことであります。近頃誠しやかにさういふ話をして居る仲間もございます。又歐羅巴、亞米利加に於きましても可なり長い以前から、日露開戦避く可らず、遠からず日露戦争起るといふことが流布されて居るのであります。尙ほ先達も亞米利加の記者が日本に参りまして、私に申しますことには、日本に来て非常に失望して居ると申しますから、どういふことふと、亞米利加で聞いて來た所に依れば極東は大變だ、今日は戦争の準備の真最中であつて、君が日本に着く頃には、今般が鳴つて居るかも知れぬといふことであつたから急いで日本に來て見た。所が芝居は満員であり活動寫真も一杯た、今は戦争が始まりさうな風が見えないから甚だ失望して居るといふ話をして居りました。さういふ風に世界の隅々迄

日露戦争は必至の勢であるといふ噂が立ち、又日本の國內でも遠からず戦争が起ると信じて居るものが相當多いと思ひます。さういふことは一面から考へて洵に困つたことでありますけれども、亦一面から吾々日本人が國家の前途に横たはる此種の問題を眞面目に考へ始めたといふことは大變に結構なことである。斯様な大問題を輕々に取扱ひ、お隣のお家騒動を見て居るやうな氣持で眺めて居つたのでは洵に相濟まぬ。日露戦争果して避く可らざるものなりや、否や又何故に斯様な犠牲を拂はなければならぬかといふことを吾々が今日眞面目に考へることは、蓋し當然の義務であると考へるのであ



ります。

然らば何故に世界の隅々迄斯様な噂が傳播されたかといふ原因を考へますと、これには可なり複雑した原因があると思ひます。先づ第一には世界の各地には日露戦争の起ることを希望して居る分子が相當に多いといふことであります。單に外國のみならず、日本國內に於ても戦争が起つたら一儲しやうといふやうな氣持で期待して居る人が無いとも限りませぬ。又外國の立場から言へば政治的原因、經濟的、商賣上の原因等色々ありませう。政治的原因といふのは、歐羅巴としても政治上の主義を同じくしない露西亞が歐羅巴に勢力を及ぼすことは希望しない。何とかしてこの力を亞細亞の方に釘付にして置きたい。又日本といふ國は段々新興の勢力を以て極東の政治的地位を獨占しつゝある。この勢力を押へることは歐羅巴、亞米利加と雖も極めて困難であるから、幸ひにして露西亞と日本とが戦争をして双方共疲弊して呉れ、ば歐米としてはこれに越した幸はない、斯ういふのが戦争を希望するもの、政治的見解であると思ひます。日露戦争によつて英吉利は印度に對する壓迫を除き、支那本部に對する日本の壓力を軽くすることが出来る。亞米利加としては極東問題に對する米國の發言權を一層強くすることが出来る。其他支那の如きも固より日露兩國が戦つて疲弊することを最も希望して居る國と言ひ得ると思ふ。或は又經濟上から云へば現在の世界不況が日露戦争の勃發を一轉機として軍需品が賣れ重油が多量に賣れる、船足が重くなるといふことは世界經濟不況を克服する一つの方法である。これに依つて相當の金儲が出来るといふ期待を有つて居る人も可なりあると思ひます。さういふ希望を抱き乍ら現在極東の情勢を觀て居る人々には日露戦争は必至の勢であるやうな、自分の希望に副ふ判斷を下すといふことは人生の弱點であつて、吾々もよく理解の出来る點だと思ひます。

それから第二には露西亞及支那方面の宣傳の勢力といふことを考へて見なければならぬと思ひます。露西亞としては第三インターナショナルの機關のみならず、世界各地に多くの通信網を有つて居ります。その宣傳の範圍に於て、又その金の注込方に於て恐らく日本とは比較にならない、……恐らく何十倍の金と力とを宣傳に用ひて居るのでありますから、露西亞が立つて、極東の風雲急なり、日本が今に西比利亞に攻入るが如き宣傳をしやうと思へばその宣傳を世界の隅々迄容易に及ぼすことが出来る。これも吾々としてはよく理解が出来る。又支那の宣傳がこの露西亞の宣傳と大體歩調を合せ得るといふことも理解し得ることあります。かういふ世界的に組織を有つて居る大きな宣傳機關が極東の風雲急なりといふ種類の情報を世界各地に撒散らしたことも日露戦争の噂が斯様に隅々迄行届いた一つの原因であると思ひます。けれども若しこれ等の噂が全く裏書すべき事實を伴つて居なければ斯様に執拗に世界の各地に行はれる理由は無いと思ひます。併しその噂を裏書するやうな事實が極東に現はれて來て居る。露西亞の方から云へば、滿洲事變前に極東に居りました露西亞の軍隊は歩兵が二個師團、騎兵が二個旅團といふ程度であつた。それが今日では陸軍省の發表に依りますと歩兵十個師團、騎兵二個師團、其他に尙ほ若干の國境護衛部隊が居ります。さうして飛行機約六百機、戰車三百五十臺、其他に化學兵團を持つて來て居る。一方日本の國內の情勢を見ますといふと、滿洲事變以後今日迄政府は莫大の軍費を投じて軍備の充實を圖つて居る。又國內の新聞雜誌には或は日露戦争の危機を國民に警告するやうな文章も出て居るし、又國內に到る所に露西亞反對の講演が行はれ、或新聞の如きは赤露討つべしといふやうな題目を掲げて毎日のやうに眼前に突付る。日比谷公園では赤露討伐演説會が開かれる。さういふ情勢を外國が見れば愈々日本が何かしら準備をして居る。一九三五、六年の危機と日本人が言つて居る。一九三五、六年には何かやるだらう。それなればこそ海軍も擴張し陸軍も擴張

して居るではないか、さうすれば陸軍としては矢張り相手は露西亞だらう、海軍は亞米利加とやるだらう。そこで將來の危機は日米戦争、日露戦争である。さうして今日に於ては露西亞があれ程準備して居るから寧ろ日露戦争の方が戦争になる可能性が多いだらうといふので、日米戦争論よりも一層日露戦争論の方が世界に強く響いて居る、かういふことがこの噂を生んだ一つの有力な原因であると私は思ふのであります。

然らば如何なる原因に依つて戦争が起るかといふ問題になる。兩國共に大戦争を始めるといふには戦争に訴へるだけの相當大きな理由が無ければならぬ。どういふ問題が日露兩國をして戦ひを開かせる原因になり得るか。外務大臣の口調を藉りて申しますと、丁度先般廣田、ハル覺書にありました如く、『日米兩國の間には平和的に解決し得ざる問題は一つもない、』とあの覺書に書いてある。それと同じ言葉を以て現在の政府に於ては、『日露兩國の間に平和的に解決し得ない問題はない、』かういふ風に説明して居るのであります。これを具體的に考へて見ますと、日本と露西亞との間に今日どういふ懸案があるかといふことであります。その中で一番吾々が重大な關心を持つものは言ふ迄もなく滿洲問題であります。それ以外に何があるか。或は西比利亞沿海州の漁業問題も考へ得られます。或は北鐵の賣却問題も考へ得られる。更に進んで露西亞共産黨の宣傳、極東に於ける共産黨の活動といふことも一つの問題に數へ得ると思ふのであります。それ等の問題に就ては既に皆さんは能く御承知のことではありますが、お話の順序としてこれ等の諸問題に簡単に觸れて見たいと思ひます。

先づ滿洲問題が果して日露の間に戦争となる危険を有つて居るかどうかといふ問題であります。御承知の通り日露戦争後のポーツマス條約に依つて大體南北滿洲が日露兩國の勢力範圍として協定されました。ポーツマス條約後に出來た第一回の日露協約に依つて南北滿洲の境界が決められたのであります。朝鮮と西比利亞の境にあるボシエツト灣からして、松花江の支流の哈爾濱から新京に來る中途の鐵橋に向つて線を引き、それを其儘眞直ぐに延長した線を以て南北滿洲の境界と決めた。それから第二回協約に依つて更に日本は朝鮮を併合し、露西亞は日本の朝鮮併合を承認する代償として外蒙古に自由な行動をとる。かういふ協約が出來上りました。それが今日日本が朝鮮を併合し、外蒙を露西亞が左右して居る起原であります。それから更に一九一六年に出來上りました協約は寧ろ日露防禦同盟條約とかいふ可き性質を有つて居つた。唯この日露協約はその翌年三月に露西亞の革命が起りました爲に僅か一年足らずの運命で事實廢棄されてしまつたのであります。併乍らこれ等數次の日露協約に依つて大體極東に於ける日本の勢力範圍、露西亞の勢力範圍といふものが決つた。所が革命後の露西亞は極東に力を入れることが出來ない、段々實際上の勢力を失つて、一九二四年に北京で露支協定が出來まして、從來露西亞が獨占の形で運用して居つた東支鐵道を支那との共同管理に依つて運用するといふ所迄讓歩しました。この讓歩は現實に於ける露西亞勢力の減退を意味したものと見て差支ないと思ひます。所が其後滿洲事變が起つて北滿洲に於ける露西亞の地位は根本的に覆へされることになつて來た。事變の起つた二ヶ月後には多門師團が嫩江を渡つて齊々哈爾濱に入つた。翌年の一月には哈爾濱に日本軍が入つた、間もなく蘇炳文、馬占山の討伐を経て滿洲は全部日本軍の占領に歸した。所が當時の露西亞は日本政府から北滿に於ける露西亞の權益は飽迄も尊重するといふだけの保證を與へられたから殆ど抗議もせず事態を見送つて居たのであります。恐らく露西亞としては日本と衝突することは極東西比利亞全部を危ふくする原因になる。僅に三個師團の兵力を以て戦端を開く如きは到底想像も出來ない。是等諸般の考へから滿洲事變に對する露西亞の態度は終始極めて消極的であつたことは皆さん御記憶の通りであります。さうして一

昨年一月に芳澤大使がモスコイ通過の際公式に不侵略條約の提案を出したのであります。其後日本政府に於ては引續き上海事變、滿洲問題の善後措置等に忙殺されて居つて、この露西亞の提案に對する回答は容易に決定しなかつたのであります。それが漸く一昨年冬、當時内田外務大臣の下に露西亞の提案に對する廟議が決定致しました。さうして不侵略條約の締結は未だその時機に非ずと認めるといふ返事を出したのであります。私は未だ廟議決定當時の詳細な事情を承知して居りませぬ。然し不侵略條約反對討論者の相當有力者と言はれて居つた人と意見を交換したのであります。その議論の要點はかういふことだと思ひます。露西亞に對しては高壓的になるより外に問題解決の方法はない。極東で言ふことを聞かなければ何時拳骨を食はすか分らないぞといふ態度で臨んで初めて此方の主張が通るのである。所が不侵略條約を結んで總ての争を仲裁に掛けるとすれば、露西亞は到底日本の言ふことは聞かなくなるといふ論であります。さういふ譯で不侵略條約の提議は日本から一蹴したのであります。所が一方露西亞側の説明に依れば、滿洲が支那の一部であらうが或は日本の後見に依つて獨立國とならうが、西比利亞の邊境を脅威しないといふことであれば吾々としては差支ないのだ。故に日本からは西比利亞の邊境を犯さないだけの保證を露西亞に與へて貰ひたい、これが今回の不侵略條約を提起した理由である。斯様に露西亞側では説明して居るのであります。所がその不侵略條約が一蹴されて以後、露西亞國內に於ける對日的行動が著しく變つた様に私は思ふ。勿論本心に於てどれだけ變化を生じたか、私は十分な説明は出来ませぬが、唯表面に於ける露西亞の行動が著しく變つたといふだけは疑ひない。現に一昨年のクリスマス頃に日本の回答が出ると、一月七日にモロトフといふ政治家が演説して、極東の情勢は洵に急迫して居る、露西亞は五ヶ年計畫の費用の一部を割いても極東の軍備充實に充てる外はないといふ意見を發表して居ります。爾來引續き露西亞は常に極東の風雲甚だ急なりといふ

ことを内外に宣傳して來ました。併乍ら大體北滿洲に於ける權益を棄て、一時滿洲を退却する外はないといふ決心をしたことは間違ないと思ひます。何故かとなれば、間もなく昨年の夏になつて東支鐵道を滿洲に賣りたいといふ申出をして來ました。北滿に於ける露西亞の權益としては僅にこの東支鐵道が残つて居るのみであります。その東支鐵道をも滿洲に引渡さうといふのは結局滿洲に於ける權益を諦らめて出て行かうといふ意思を持つて居ることだと思ふ。そこで茲に北鐵の賣買問題が起つた。

北鐵賣買問題の經過に就ては既に皆さんも充分御承知の通りであります。第三者として此北鐵交渉の經過を見て居りますと如何にも露西亞らしい所がある。又如何にも日本らしいヘマをやつて居ると思ふ。公平に見て今日迄の經過は、外交交渉としては決して巧みであつたといふ譯にはいかないと思ひます。勿論物の賣買でありますから賣手は一厘でも高く賣りたい。買手は一厘でも安く叩いて買ひたい。これは物の賣買に伴ふ當然の現象であります。そこで露西亞は北鐵を二億五千萬金留といふ値段で賣りたいといふ申出であります。それを滿洲國は五千萬圓ならば買はうと云つた。二億五千萬金留といふ金は今日の紙幣に換算致しますと約六億二千五百萬圓になります。千五百哩の鐵道を五千萬圓で買はうといふことであれば、約一哩三萬圓となります。滿洲の鐵道の建設費に詳しいことは記憶して居りませぬが洩昂線は確か一哩に十萬圓位掛かつたと思ひます。それを三萬圓で買はう、斯ういふことなんです。これはどういふ譯でこれだけの開きが出たかといふと、露西亞人は恐らくレールやローリングストックのみを見積つて賣らうといふ考へではなかつたに違ひない。丁度魚河岸の魚屋さんが立退に當つて舟板權といふものを賣却したと同じやうに、露西亞は北滿洲を捨て、行くのだから、立退料を何程か見積るのが當然だといふので恐らく高く吹掛けたものと思ひます。所が滿洲側から云へば、元々東

支鐵道は露西亞の極東侵略の道具に使はれた鐵道だ、無代で引渡して歸つても罪亡しとすれば當然のことだ、實際一哩三萬圓さへ安くはない。かういふ氣持があつたことと思ひます。ですから初めからこの値段は兩方共算盤をとつての値段ではなかつたのである。そこで愈々交渉が始まると段々兩方から値段を讓歩して御承知の通り最近外務省が最後案として出した案は、鐵道代金が一億二千萬圓、従業員の解職手當が三千萬圓、露西亞の方ではぎり／＼結着の値段として鐵道代金一億六千萬圓、解職手當三千萬圓といふのでありますから結局其開きは四千萬圓。若しこれを双方から歩み寄つて兩方が二千萬圓宛讓歩すれば或は茲に賣買の契約が出来たかも知れない。

所がこの交渉中に色々感情を刺戟するやうな問題が起つた。先づ初めに起つた事件は御承知の通り昨年此交渉が始まつて間もなく東支鐵道の管理局長以下十數名の露西亞人が引擱まつて哈爾濱の牢獄に打込まれた。それと時を同じうして哈爾濱及び東京方面から東支鐵道實力撤收論といふのが宣傳された。若し露西亞が適當な値段に負けて賣らなければ鐵道を實力で獲得する、かういふ宣傳であります。そこで露西亞の方は、若し其方が實力で取るならば吾々も黙つて引込む譯にいかない、露西亞人の管理局長を解放されない限り鐵道交渉を續ける譯に行かないといふことで鐵道交渉は斷絶された。それが本年の三月に管理局長以下が監獄から開放され、漸く鐵道交渉を再開するといふことになつた。勿論この實力撤收論と管理局長以下の逮捕問題とは關係が無かつたことと思ひますが、併し偶然にこれが時機を同じくして起つた爲に露西亞の方では、愈々管理局長をふん縛つて置いて實力で嚇かす積りだ。かういふ風に解釋した。今回も亦然り、今回愈々最後案に依つて物別れになるといふ時に露西亞は日本政府と何等交渉せず直ぐに交渉の經過を發表してしまつた。さうすると又時を同じくして滿洲國側では東支鐵道沿線の驛長とか營業課長等七十何人ふん縛つて監獄に打込んだ。これを露西亞

は歐米に放送して曰く、日本は東支鐵道沿線に戒嚴令を布いて愈々實力撤收の準備をして居る、かういふことを世界各國に宣傳して居るのであります。

さういふ風に北鐵問題は品物の賣買である性質を離れて、常に政治問題とこんがらかつて今日迄進んで來たことが兩國の空氣を極めて悪くし、且つ問題の解決を困難にしたのであると思ふ。若し單なる鐵道線路の賣買であつたならば、或は滿鐵邊の専門家の手に委して、東支鐵道の重役と話合を進めたならばこの交渉は或は逸早く圓滿に解決したのではなかつたか。斯様に私共第三者として考へられるのであります。尤も私の承知して居る限り露西亞は何とかして北鐵交渉を再開して問題を解決したいといふ考を持つて居るものと判斷して居りますが、唯前回の成行から見ましても東支鐵道従業員の拘禁を開放するといふことでないか或は交渉の再開を申込むやうな機會を捉へ得ないのでないかとも考へられます。併乍らどんなに考へて見ても鐵道の代金四千萬圓の開きの爲に日露戦争が起らうなんといふことは吾々には想像が出来ない。戦争をするよりは四千萬圓の半分、二千萬圓を出した方が餘程安上りに解決がつくと思はれるのであります。

かやうに鐵道の問題があり、不可侵條約の問題もありますが吾々から見れば先づ現在の情勢に於て露西亞は北滿洲の權益に諦めをつけた。さうして西比利亞の邊境を一生懸命に守る決心をして居る如く見える。これだけの成績を收め得たといふことは過去二、三年間の事變の結果として洵に大きな收獲である。誰が見ても立派な國策の勝利である。それなればこそ軍部の方々でも滿洲事變は蕎麥屋に行つて牛鍋に打突つたといふことを言つて居られる。これだけの成功は確に滿洲事變のお蔭であつたことは何人も疑はないと思ひます。

然らば滿洲國に對して露西亞はどういふ風に考へて居るかといふと、實力に訴へて北滿に於ける露西亞の勢力を取返さ

うといふ考は差當り持つて居ない、又斯様な計畫を實現するだけの力を持つて居らぬと思ひます。其點は尙ほ後に申上げますが、今日露西亞が神經質になつて居るのは、要するに日本の態度に對する一つの大きな誤解である。それは何かといふと、日本は滿洲が一段落ついたならば今度は支那本部と西比利亞に這入ると固く信じて居る。私はさういふ問題に就て一、二月前に日本に来て居る露西亞の外交官と一晩可なり議論をしたことがあります。色々説明を加へましたけれども彼等の頭はどうしても動かない、遠からず日本が西比利亞を敲きに來るといふことを一つの動かす可らざる豫定の行動と見て居るやうであります。其判斷が結局極東に對する露西亞の政策の基礎をなして居る。又現在に於ける露西亞の外交の樞軸を爲して居る。斯様に私は考へるのであります。露西亞政府が斯様な判斷を下した原因は何所にあるかといふと、結局日本の國內に於ける各種の現象、日本國の動向を判斷して彼一流の解釋を下して居る。私共は日本政府の責任ある人が未だ曾つて一度も斯様な考へを有つて居ないことは明かだと思ふ。好戰的言論は新聞にも或は演說會にも出て來るが、さういふ言論は何れも無責任な言論であつて何等責任を負ふ可き地位に居る人ではないと説明するが、これに對する彼等の觀方は、『それが日本と外國と違ふ所だ、日本では責任があるとかないとかといふことに依つて言論の輕重を判斷する譯にはゆかぬ。責任のない地位に居る人の言論が時としては直ぐ實行される、そこに吾々の非常な不安がある、』といふのであります。さういふ風に彼等は觀て居るのであります。併乍ら日本が西比利亞の國境を越えて攻撃的行動をとらない限り露西亞の方から進んで滿洲の國境に攻寄せる意圖のないことは大體明かだと思ふ。それならば露西亞が既に滿洲問題を過去の事實と認め、場合に依つては滿洲の獨立を認めるだけの準備があるといふことであれば、滿洲の國策に關する限り露西亞と吾々と衝突すべき危険は甚だ薄い。結局露西亞が日本の滿洲政策を認めるといふことであれば滿洲問題の爲に日露

戰爭が起ることは考へ得られない。

次に漁業問題は革命以後露西亞政府に於て一時日本人の漁區を取上げて、國營漁區として露西亞人自ら經營する方針に轉換した時代がありました。所が國營漁區の成績を見ますと毎年非常な缺損である。それが爲に一九三一年から二年に掛けた交渉に於て露西亞は可なり日本の漁業家に有利な解決を與へました。今日では沖取漁業に於て或は露西亞の監視船と日本の漁業家との衝突があるといふやうな局地的な行違ひはありますが、併し露西亞政府の根本方針としては日本の漁業家に多くの障碍を與へないことに決定して居る如く思はれるのであります。唯問題となつて居るのは日本の圓と露西亞の留の換算相場の問題がありますが、併乍らこれも爲替相場の問題でありますから、勿論これを戰爭と結付けて考へるべき性質のものでないと思ふのであります。

それから最後に露西亞の共產黨宣傳の問題であります。私は餘り共產黨宣傳の問題を研究したことはありませんから詳しい話は勿論知らないのですが、唯私の申上げやうと思ふことは、若し露西亞が共產黨の宣傳を行なはうとする考を有つて居るならば日露の間は國交を斷つてしまつても、國交を斷つたが爲にこの宣傳を防止することがどの位容易なるか、恐らく國交を續けて居つても斷絶しても其程度には餘り多くの差異は無いのじやないか、又假令戰爭に依つて露西亞を打破つたとしても、露西亞が共產黨政府を維持して行くことを戰爭の結果思切らせる譯にいかない。隨て共產黨宣傳に對する政策としては外交問題として取扱ふ場合には彼等をして日本國內に宣傳の手を及ぼさない約束を嚴重に守らせる以外に方法は無いと考へられます。

更に進んで、然らば一體露西亞が今日の情勢に於て大戰爭を爲し得るだけの状態にあるかどうかといふことを考へて見

たいと思ひます。私は大正三年の初めから大正七年の初め迄露西亞に勤務して居りました。其後は一、二度旅行したことがある位で長く露西亞に生活したことはない、併乍ら一昨年露西亞を旅行しました當時の私の印象を今日でも改める必要がないと思つて居ります。それは一言にして言へば、結局いくら革命をやつても露西亞人は露西亞人だといふことであります。革命前の露西亞はツアールの専制政治の下に數十萬の役人が露西亞を政治して居つた。皇帝の意思が同時に國の法律であり命令であつた。その状態は今日でも矢張り同じことである。ソヴィエツト制度と稱して一見プロレタリアの政治のやうに見えますけれども、一成程露西亞國內にはインテリ階級、資本家といふものは悉く國外に放逐され、或は殺されたのでありますから、現在に於ては多くはプロレタリアが露西亞の國家を成して居る、併しこれを動かすものはスターリンといふ、丁度昔のロマノフ家の身代りになつたやうな専制の主権者であります。又今日の露西亞國內の情勢を見ますと、成程國家社會主義政策を採つた國家として重工業、織維工業、水力電氣方面に大規模の設備はして居ります。併し國內には多數の不平等分子が居り、今日の勞農政府といふものが左程安心して政府の基礎の堅いことを誇り得ないだけの弱點を持つて居るかに私は考へるのであります。斯様な政權が近世の大規模な戰爭を果して長く堪へ得るや如何といふことになると私は多くの疑問を持つのであります。さうかといつて今日の近代化した露西亞の軍隊を非常に軽く見るといふことは勿論誤りであると思ひます。尠くも日露戰爭當時の露軍に較べて今日の露軍は寧ろ強化されて居ると見るのが當つて居るかと思ひますが、露西亞國家の基礎に於ては相當大きな弱點を持つて居る、斯様に私は觀て居るのであります。

從來露西亞の歐羅巴政策は主として革命當時の理想、或は革命哲學に依つて指導されて居つた爲に最近に至る迄極めて不利益な地位に立つて居つた。それが過去三、四年の間に著しく有利な轉換を爲して來た。かういふことは充分吾々も認めなければならぬと思ふのであります。

最近報ぜられてゐる露西亞の聯盟加入或は東歐ロカルノといふやうな問題に就きましてもその一つの現はれであると思ひます。言葉を変へて申しますと、今日の歐洲の國際情勢が露西亞に有利になつたといふことは西歐羅巴に起つた形勢の變化と、露西亞内部から起つて來た外交政策の轉換とが丁度旨く出會つたことにあると思ひます。その一、二の點を申し上げますれば、レーニン及びチエリンが露西亞の革命を指導して居つた當時の指導原理は云ふ迄もなく世界革命、プロレタリア國家の建設といふ一本調子であつた。隨て歐羅巴政策に於ても西歐羅巴の資本主義國に對立して植民地、或は壓迫されて居る民族を助けて、其間隙に乗じて資本主義國家に當たる。例へば亞細亞に於ては朝鮮人であるとか支那人、瓜哇、印度、或は佛領印度支那方面の植民地並に資本主義國より壓迫されたる國々を助けて資本主義國に當たる。チエリンが常に言つて居りましたやうにソヴィエツトは弱國の友人であるといふ方針を一貫して行つて來て居つた如く見えます。所が段々世界革命を煽動して見た結果、或は共產主義を宣傳して見た結果容易に西歐羅巴に世界革命を起す可き形勢を出現し得ない。又共產黨宣傳も歐羅巴では多くの効果を現はさなかつたといふやうなことが段々知れて來ると同時に、露西亞國內に於ける經濟生活が益々苦しくなつた。國內の經濟生活を安定するに非ずんば勞農政府の政權の基礎が危ふくなるといふ事情が明かになつた。そこで茲に初めて露西亞の第一次五ヶ年計畫といふものが出來上つた。その五ヶ年計畫が完了しない中に更に第二次五ヶ年計畫といふものを作りました。露西亞政府の出して居る説明書、統計書類等は何れも第二次五ヶ年計畫の成績を麗々しく誇つて居りますけれども、これに費した金、その生産能力等に就ては必ずしも精確であるか否か判明しないのであります。果して彼等の言ふが如く好結果を挙げたかどうかといふことに就て私は疑を持つて居りま

すが、何れにしてもこの産業大計畫を實施する爲に外國の資本が必要である。或は外國の技術を借りなければならぬ。技術を借り資金を借りる爲には一時資本主義と妥協する事も已を得ない。そこで從來の世界革命的外交を轉換して茲に歐羅巴の資本主義國と妥協するといふ政策が出たのであります。而もこの外交を指導したのはチチェリンが病氣で退いて以後リトヴィノフといふ男で、これは徹頭徹尾實際的政治家で、理想も空想も現實の爲には喜んで犠牲にするといふやうな型の外務大臣であります。そこで過去一年半、或は二年間の露西亞の外交を見ますと明かに此間の變化が認められるのであります。その結果過去二年間に露西亞が諸外國と結んだ色々な條約は十五ヶ國以上に亘つて種々のものが出来上つて居ります。昨年十一月に亞米利加と國交回復條約を結び、十六年間斷絶して居つた常軌の國交を回復した。或は昨年六月の倫敦經濟會議の機會を利用して歐羅巴の國境方面にある七ヶ國と不侵略條約を結んだ、其他不侵略條約に類する不侵略定議條約といふものも結んで居ります。或は佛蘭西、伊太利とも同様の條約を結んだ。さうして昨年の夏元佛蘭西の總理大臣をして居つたエリオが露西亞に旅行した機會から段々佛露の接近が始まつた。丁度昨年一月にヒットラーを首班とするナチスの内閣が獨逸に出来上つた。ナチスの外交政策は今日から見れば政權を取る以前に比して極めて實際的に傾いて来たことは疑ないと思ひます。その一つの例は、最近東地利のドルフスが殺された際に於けるヒットラーの極めて慎重な態度を見ても明かであると思ひますが、尠くも政權を取る迄のヒットラーは國民に向つてヴェルサイユ條約の廢棄を約束し獨逸國外に於けるゲルマン人種の統一を約束した。斯様なプログラムの下に起つたのでありますから、ヒットラーが天下を取ると同時に歐羅巴諸國に大きなセンセーションを與へたのは當然のことだと思ひます。所が昨年の夏倫敦の世界經濟會議に於て獨逸の或代表が一つの覺書を出したのであります。その覺書の中に、獨逸の將來は東にあるといふことが書い

てある。後で獨逸政府はこの覺書を撤回して種々釋明致しましたが、その覺書の意味は、戰爭に依つて植民地を失ひ、本國の版圖を奪はれた獨逸は東に伸るに非ずんば窒息してしまふ。これは獨逸當然の要求であるといふことが書いてある。之と併行してポーランドとドイツとの關係が問題になつた。それはどういふことであるかといふと、波蘭の元老政治家にピルス・ヅスキといふ元帥がある。この一派の考は、將來の波蘭、獨逸の國交の痛を爲すものはダンチツヒの廻廊と言はれて居る土地である。波蘭はダンチツヒの廊下が海港に達する唯一の道であるから到底これを放棄する譯にはいかない。又獨逸から見れば東プロシヤを眞二つに中斷されるのでありますから、他の土地は兎も角としてダンチツヒの廻廊だけは是非回復しなければならぬ、かういふことが大體獨逸人多數の輿論であると思はれます。そこで波蘭はこのダンチツヒの廻廊を斷念せしめる代償として更にバルチックの沿岸の諸國に獨逸が領土を擴げること認めやう、さうして同時に波蘭は南露西亞、殊にキエフの町を中心にした方面迄國境を擴げて行かうといふ考をピルス・ヅスキ一派の政治家が有つて居ると言はれて居ります。さういふ點に於て昨年以來獨逸と波蘭との關係がどうも今迄と餘程趣を異にして居る。若し斯様な事實が歐羅巴に行はれつゝありとするならば常に獨逸を怖れて居る佛蘭西及び其同盟國、例へばチエツコスロヴァキヤ、ルーマニヤ、ユーゴスラビヤといふ國々に取つては非常に大きな脅威である。獨逸に對抗するプロツクとしては非露西亞を引込むことが必要だ、かういふ立場から昨年以來佛蘭西に於ては次第に露西亞と接近する空氣が濃厚に進んで来たのであります。そして本年の五月になつて露西亞のリトヴィノフがヂェネバに出て来て、此時初めて東歐ロカルノといふ案を出して来た。東歐ロカルノといふのは東歐羅巴諸國の間に相互援助條約を結ぶといふ考へであります。或國が外國から侵略された場合に締約國は互に武力を以て援助するといふ案を出して来たのであります。これに對し英吉利政府

は、相互援助條約は徒に利害關係の無い國の爲に兵力を動かすやうな處があるから英吉利政府としては賛成する譯にいかない、東歐羅巴の安全を英國が保障することは出来ないといふ趣意をはつきり佛蘭西の外務大臣に通じたのであります。そこで佛蘭西の外務大臣は英國に向つて、英國が参加しないことは致方ないけれども、露西亞及び佛蘭西が共に此東歐羅巴諸國にこの條約を勧誘することは同意を表して貰ひたい。歐洲大陸の形勢が現在の如き姿である際に、若し露西亞が差出した手を佛蘭西が振放すといふことであれば獨逸と露西亞の間に何が出来るか分らぬ。露西亞から求められた手は佛蘭西としてはどうしても握らざるを得ないといふ事情を切々懇へたといふことであります。佐藤大使が歸朝前巴里でバルツ1外務大臣に暇乞ひに行つた時にも佛蘭西代表は、歐羅巴政策の立場から見ても、佛蘭西が露西亞との同盟を或程度回復することは已を得ない事情にあるのだ。併乍らこれが爲に佛蘭西は少しも露西亞の極東政策を支持するといふこともなし、又佛蘭西が極東問題に於て其進退を拘束されるやうなことは絶対に無いといふ事情を話したといふことであります。

斯様な形勢で東歐ロカルノ條約は六月以後各國の間に交渉を重ねられたのでありますが、獨逸と波蘭は先程申上げたやうな事情からこれに入つて來ない、のみならず波蘭は非常任理事ではあります但し波蘭が聯盟理事國の一員でありますから、理事會の決議が滿場一致を必要とする關係上、露西亞の聯盟加入に對しても相當有力な發言を爲し得るのであります。そこで佛蘭西としてはポーランドが露西亞の加入を承諾する代償として東歐ロカルノ條約を思切るといふ取引を行つたと見え、國際聯盟に加入を許すけれども東歐ロカルノだけは思切るといふことで最近露西亞の聯盟加入が實現した如く見えます。

斯様に露西亞の立場は歐羅巴方面では相當に強くなつて來た。それと同時に極東に於ける軍備も最初申上げた程度に充實した。又世界の多くの國々が日本の從來の動向を見てどう考へて居るかといふと、日本は滿洲だけでは満足しない、今に支那本部に這入つて來る、或は西比利亞に這入るといふ風に觀察して居る、其世界の觀察に乗じて出来るだけ日本を侵略者であるが如き立場に陥入れる宣傳運動が相當執拗に行なはれた。それが今日の日露關係を極めて切迫した如き状態に陥れた原因だと思ひます。斯様な情勢に當つて諸外國に於ては將來の日露戰爭の勝敗はどうであるか、戰爭は如何なる形に於て開始されるか、といふやうな論が彼方此方に現はれて居ります。その一、二を極く簡単に御紹介して置きたいと思ひます。

本年の七月に亞米利加の Foreign Affairs といふ雜誌に米國參謀本部のベッツといふ人が將來の日露戰爭の戰術といふ論文を書いて居りますが、これは皆さん既にお読みになつたことと思ひます。それから更に將來の日露戰爭に當つて必要とする戰時費の問題に就て日本の方でも發表されたものがあり、又露西亞側でこれに相當詳細な批評を加へたものもあります。その各方面の説を極く簡単に掻摘んで申し上げますと、亞米利加のベッツといふ人はかういふ風に見て居るのであります。日露開戰の場合、日本は先づ東は浦蘆斯德から西は外蒙のキャラクタに至る線に亘つて攻勢を開始する。さうして浦蘆斯德の要塞を占領することは日本が眞先に考へるであらう。何となれば浦蘆斯德にロシア飛行機の根據地のある間は日本本土が常に露西亞飛行機の脅威の下にあることになるから、出来るだけ速かにこの要塞を占領する決心をするであらう。併乍ら露西亞は現在の兵力を以てしてはバイカル湖より浦蘆に至る線を維持することは到底不可能だ、間もなくこの交通聯絡は斷たれるに相違ない。而して飛行機の根據地は出来るだけ一ヶ所に集中せず各所に分散することが近世の飛行機の戰術であるから、露西亞も恐らく西比利亞各地に小さな根據地を澤山作つてゐる。其本據は恐らくハバロフスクの

西北に置いて居るであらうといふことを書いて居る。さうして浦鹽には五萬位の守備隊を以て籠城するであらう。現在浦鹽にある兵力は大體四個師團といふことになつて居りますから、これを攻める日本の兵力は一倍半若くは二倍を必要とするが、結局残つた飛行機は西比利亞の奥へ逃げて行くであらうと書いてある。それから日本軍はこの浦鹽に一部分の兵を止めて段々黒龍江の方面に進軍する、さうして約半歳乃至一年の間にバイカル湖附近の山嶽地帯に達するであらう、其時の兵力は日本軍が七十五萬、露西亞が四十五萬位を集中するであらう。現在露西亞はバイカル湖の背後のヴェルフネウヂンスクからキヤクタに至る一線の鐵道を敷設中だと書いてあります。又日本軍の切斷を恐れてバイカル湖の北を廻つて西比利亞の奥地に通ずる鐵道を烏蘇里方面からも建設して居ると書いてある。そこで結局バイカル湖の附近に於て七十五萬の日本軍と四十五萬の露西亞軍が對峙する、この戰爭に於て日本はバイカル以西に進む可き何等の必要を持たない、この邊で先づ一段落つける積りであらう、隨て戰爭はこの邊で持久戦に入る。さうして日本は戰爭には勝つが二十ヶ月位で國力が續かなくなつてへこたれるだらうといふのがベツツの大體の論旨のやうに思はれます。

次に戰爭の費用の問題であります、これは私よりも實は皆さんの方が餘程詳しい事でありますから或は釋迦に説法かと思ひます。一體次の日露戰爭が起るとしてどれ位の金が掛かるかといふ問題であります。御承知の通り日清戰爭の時には僅に一億圓の費用で出來た。さうして日露戰爭の時の戦費は約十五億圓、其中の半分近くは外資を借入れたのであります、全部合せて二十億位で戰爭の結末が着いた。所が歐洲大戰中各交戦國が使つた金は到底日露戰爭當時の比でないことは御承知の通りであります。英吉利、獨逸、亞米利加等の例をとつて考へて見ますと、英吉利、獨逸は平均して一年に百六十億圓、亞米利加は一年に二百四十億圓の金を使つて居る。英吉利の如きは一番絶頂に達した時には一日に五百萬

磅の軍費を支出したのであります。そこで日露戰爭の當時幾ら金が掛つたかと申しますと、戰爭前の陸軍の兵卒一人割の費用は八十錢、然るに戰爭が始まるとこれが二圓三十錢になつて居ります。現在陸軍で兵卒一人當り幾ら使つて居るかといふと作戰資材は別であります、二圓四十錢といふ金高になつて居ります。森主計正の計算に依りますと、日露戰爭の時には戰爭が始まつて三倍になつたのであるから將來戰爭が起れば平時の三倍即ち七圓二十錢といふ頭割になる。さうすると百五十萬の兵隊を動員すると約三十九億五千萬圓といふ數字になる。其他海軍の費用が十三億五千萬圓、それから工業動員其他の間接戦費といふものが十六億五千萬圓、合計六十九億五千萬圓掛かるといふ計算になつて居ります。これは陸軍の森主計正の計算であります。所が愈々戰爭が始まつて果してこれだけの金で足りるだらうか？これは露西亞人のターニンといふのとヨガンといふのがイズヴェスチャに發表したものです、主として森主計正の發表を基礎にして書いたものであります。戰爭を一年間するとどうしても百萬人の損害があると見なければならぬ。だから開戦一年後に日本が約三百萬人動員したといふ計算で算盤を立て、居るのであります。その二百萬人を動員してこれが一籽の戦線に必要とする大砲、タンク、飛行機、毒瓦斯其他の材料を計算致しますと、かういふ細かい數字を申上げても一向興味がありません、それから糧食、被服、給與が十八億、軍需工業の資金が十億、海運航空運輸の燃料費其他のものが十五億、合計百十三億圓掛かる。これを頭割にして見ると兵卒一人當りが十五圓六十錢につく、かういふ計算であります。さうしてこの百十三億圓といふものは世界大戰當時の交戦國の費した平均戦費百三十八億圓に較べても約二十五億圓少い數になるといふ事になつて居ります。そこでこの一年間の百十三億圓の軍費の中でどれ位外國拂が必要かといふと棉花、重油、其他日本では非外國から輸入

する事を必要とする金屬類及び機械類を合せて大體三十億圓の海外拂が必要になるといふ事であります。さうするとこの計算で行きますと、先づ日本の國民所得といふものが全部合せて日本政府に於ては約百三十三億圓といふ統計を立て、居るけれども實際は百億圓に足りないといふのが露西亞人の觀方であります。その百億圓に足りない國民所得を百十三億圓迄一年に使ふのであるから先づ二十ヶ月にして日本は戦費を支出し得なくなる。尠くも莫大な外債を募集するに非ずんば二十ヶ月以上の戦争を続ける事が出来ぬ、かういふ風な結論になつて居ります。そこで勿論日本は不換紙幣で、或は公債で戦争をするであらうが、獨逸が戦争を始めた時は、獨逸政府の有つて居つた公債は國民所得の一三%にしか當つて居なかつた。所が今日の日本は大體國民所得の一〇〇%迄既に公債を發行して居る。故に將來日本が有事の際に當つて發行し得る公債の高は比較的少ない程度で飽和點に達するのであらうといふやうな事と迄書いて居るのであります。これは勿論唯一種の觀察として茲に御紹介申した程度に過ぎないのであります。私個人としては日本が將來大義名分無くして斯様な戦争を始めるものとはどうしても信じ得られない。この前の日露戦争の當時は申迄もなく滿洲は全部露軍の占領の下にあり、朝鮮に於ても龍巖浦には露西亞の陸兵が這入つて居り、又馬山浦には露西亞の海軍根據地が設けられ、謂はゞ日本本土の脇腹にコサツクの槍が突刺さつたやうな状態に於て日露戦争が始まつた。それなればこそ世界各国の輿論が日本を支持した、さうして日本國民は上下一致して一糸亂れず戦ふことが出来た。將來と雖も斯様に日本の國防が脅威され、或は日本が何所迄も正しい立場を守るといふことであれば世界は必ず日本に對して滿腔の同情を持ち、又國民も一致結束してこれに當ることは疑ひないと思ひます。若し戦争があるとすればどうかさういふ境涯に於てのみ戦ふことを望むのであります。よく世間では戦前の獨逸と今日の日本とを比較しますが、公平に見て戦前の獨逸は外交的準備に於ては日本よ

りも遙に良く出来て居る。當時の歐羅巴の形勢を見れば、伊太利は同盟國でありましたが差當り中立を布告した。併し獨逸としては伊太利を戦争に参加せしめることを決して絶望して居つた譯ではなかつた。又奧地利洪牙利の隣には勃牙利といふ同盟國がある、更に其南には土耳其といふ同盟國がある。羅馬尼亞へも一時は奧地利洪牙利と手を取つて共に立つ所迄行つて居つた。換言すれば北海より波斯灣に至る迄皆獨逸の支配する處であつた。所が今日の日本の外交的準備としてはこれに比較すべき何等の同盟國を有たないといふ情勢であります。又財政經濟方面の準備から見てもあの當時の獨逸の準備と今日の日本の財政状態では比較にならない程度があると思ふ。併乍ら靜かに考へて見ると、どうも今日日本と露西亞とが直ぐに戦を開かなければ解決の出来ぬといふやうな問題は無いと信するのであります。

以上甚だ雜駁なお話を申し上げまして洵に恐縮に存じました。これで私の話を終ります。(拍手)

終